

マレビトの会 演劇公演



クリプトグラフ

cryptograph

作・演出：松田正隆 出演：牛尾千聖 F. ジャパン 武田暁 西山真来 栞谷雄一郎 宮本統史 山口春美

——嘘から出た真実。  
見えたもの、聞こえたものだけが「歴史」ではない。  
遺物や死者たちのひそやかな息づかいが暗号器官に届いたとき、  
見えないものが見え、聞こえないものが聞こえる……。  
都市についての報告演劇。

**東京公演**

日時：2009年10月1日(木)19:00★、2日(金)19:30、3日(土)14:00☆／19:30、4日(日)15:00☉、5日(月)19:00☆、6日(火)19:30

★……公演後、ロビーにて座談会を行います。  
[パネラー：松井周(劇作家・演出家・俳優/サンプル)、杉原邦生(演出家/KUNIOほか)、神里雄大(作家・演出家/岡崎藝術座)、野村政之(こまばアゴラ劇場・青年団 制作)、松田正隆(劇作家・演出家/マレビトの会)]  
☆……ポスト・パフォーマンス・トークを行います。[ゲスト：10/3 平田崇一郎(ドイツ演劇・批評家)、10/5 ゲスト未定]

会場：こまばアゴラ劇場 (東京都目黒区駒場1-11-13 / Tel 03-3467-2743 / http://www.komaba-agera.com/)

料金：●一般前売¥3,000 / 当日¥3,500 ●学生 & ユース (25歳以下) 前売¥2,000 / 当日¥2,500

※受付は開演の60分前、開場は開演の20分前 ※全自由席  
※本公演は芸術地域通貨ARTS(アーツ)をご利用いただけます。(1アーツ=1円。ARTSとは、桜美林大学演劇施設内で施行されている地域通貨です。)

☉10月4日(日)15時の回託児サービスあり【要予約】  
料金：0～1歳児2,000円、2歳児以上1,000円 / チケットのご購入とは別途、下記までお申込みください。  
【予約、問い合わせ】イベント託児、マザーズ：0120-788-222 (土日祝日を除く 10:00～12:00、13:00～17:00)



アクセス・・・京王井の頭線「駒場東大前駅」東口より徒歩3分  
※劇場に駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。

こまばアゴラ劇場では  
劇場支援会員を募集しています。  
http://www.komaba-agera.com

**名古屋公演**

日時：2009年10月9日(金)19:00☆、10日(土)19:00☆、11日(日)14:00

☆……ポスト・パフォーマンス・トークを行います。[ゲスト：10/9・天野天街(劇作家・演出家/少年王者館)、小堀純(編集者)、10/10・安住恭子(演劇批評家)]

会場：セツ寺共同スタジオ (名古屋市中区大須2丁目27-20 / Tel 052-221-1318 / http://nanatsudera.org/)

料金：●一般前売¥2,500 / 当日¥3,000 ●学生 & ユース (25歳以下) 前売¥2,000 / 当日¥2,500

※受付は開演の60分前、開場は開演の20分前 ※全自由席



アクセス・・・地下鉄鶴舞線「大須観音駅」2番出口徒歩5分  
地下鉄名城線「上前津駅」8番出口徒歩10分  
※劇場に駐車場がありません。公共交通機関をご利用ください。

【チケット取扱】

- マレビトの会 ウェブ予約 <http://www.marebito.org/> 電話予約 075-708-8025
- e+(イープラス) <http://eplus.jp/>
- 京都芸術センター[窓口販売のみ 10:00～20:00] Tel. 075-213-1000

【主催・問合せ】マレビトの会 〒606-8205 京都市左京区田中上柳町21, 3号室  
Tel&Fax. 075-708-8025 Mail. [info@marebito.org](mailto:info@marebito.org) HP. <http://www.marebito.org/>

【東京公演提携】(有)アゴラ企画・こまばアゴラ劇場 【名古屋公演提携】セツ寺共同スタジオ

【助成】芸術文化振興基金、財団法人セゾン文化財団、ASAHIアサヒビール芸術文化財団 【協力】シバイエンジン、魚灯、劇団衛星 京都芸術センター制作支援事業

●筆者プロフィール

**内野儀(うちの・ただし)**  
東京大学大学院教授。パフォーマンス研究・演劇批評。主要著書・論文に「メロドラマの逆襲(私演劇)の80年代」(勁草書房)「メロドラマからパフォーマンスへ—20世紀アメリカ演劇論」(東京大学出版会)「野田秀樹とサム・シェパードグローバリティ・国民国家・演劇」(ユリカ)など。米国を代表するパフォーマンス研究学術誌「TDR」(MIT Press)の編集委員。神奈川芸術文化財団理事・企画委員。

**森山直人(もりやま・なおと)**  
1968年生まれ。演劇批評家。京都造形芸術大学芸術学部舞台芸術学科准教授、舞台芸術研究センター主任研究員。「ユリカ」(青土社)、「PT」(世田谷パブリックシアター)などに論文を多数寄稿する。主な論考に、「過渡期としての舞台空間 小劇場演劇における昭和30年代」(『舞台芸術』連載)他。

**松田正隆(まつだ・まさたか)**  
1962年、長崎県生。90～97年まで劇団「時空劇場」代表。96年『海と日傘』で岸田國士戯曲賞、97年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、98年『夏の砂の上』で読売文学賞受賞、2000年には京都市文化奨励賞など、数々の賞を受賞。舞台戯曲の他、黒木和雄監督作品「美しい夏キリシマ」「紙屋悦子の青春」で、映画脚本・原作提供を行う。2003年より「マレビトの会」を結成。代表作に「鳥式振動器官」「クリプトグラフ」「声紋都市—父への手紙」など。

マレビトの会新作公演 / 山口情報芸術センター滞在制作作品 『PARK CITY』

【作・演出】松田正隆 【写真】笹岡啓子 【出演】牛尾千聖 F.ジャパン 桐澤千晶 ごまのはえ 島崇 武田暁 西山真来 栞谷雄一郎 宮本統史 山口春美

**山口公演** 日時：2009年 8月28日(金) 19:00、8月29日(土)14:00 / 19:00、8月30日(日) 14:00  
会場：山口情報芸術センター[YCAM] スタジオA <http://www.ycam.jp/>

**滋賀公演** 日時：2009年10月24日(土) 14:00 / 18:30、10月25日(日) 14:00 / 18:30  
会場：滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 大ホール 舞台上舞台 <http://www.biwako-hall.or.jp/>

「marebito 04」  
〒606-8205 京都市左京区田中上柳町21, 3号室 [2009.5より事務所移転しました] TEL&FAX 075-708-8025 MAIL [info@marebito.org](mailto:info@marebito.org) <http://www.marebito.org/>  
発行：マレビトの会 発行日：2009年8月25日 デザイン：相模友士郎



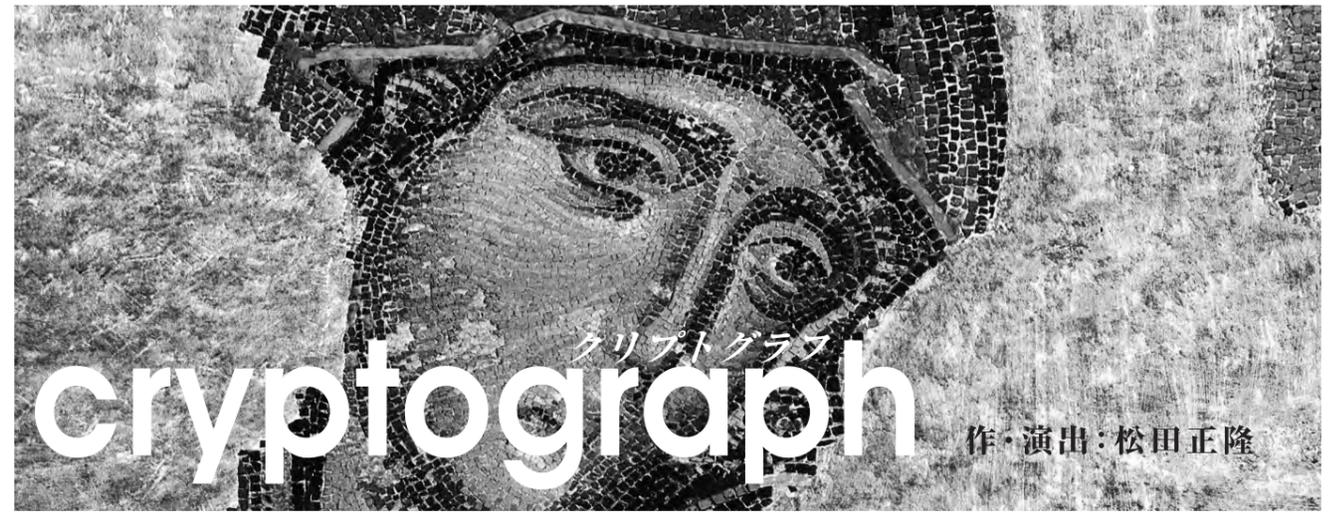
Cryptograph

NewsLetter

marebito 04

マレビトの会  
| Marebito no Kai | theater company |

2007年にエジプト・カイロでの初演後、京都、中国、インドの6都市を巡演し、各地で好評を博したマレビトの会の代表作『cryptograph』(クリプトグラフ)の国内再演ツアーを行います。



クリプトグラフ

cryptograph

作・演出：松田正隆

——嘘から出た真実。  
都市の遺物を発掘した測量士たちが、そこに秘められた暗号(クリプトグラム)を聞き取り、都市にひそむ歴史や記憶、死者の息づかいに耳を傾ける…。その遺物が発する暗号のような文字を暗号器官(クリプトグラフ)である俳優(測量士)が読み取り音声化してゆくのである。と同時に、俳優は、血液都市、戦争都市、天使都市…と名付けられた、かつて世界のどこかにあったであろう都市の相貌を持った架空の都市についての「報告」をし、あるいは都市の住民たちとなり、都市についての証言を述べていく。  
舞台上には、NYのツインタワーを想起させるような二つの柱、そこには次々とイメージが映し出される。また、いくつもの電球が天井から垂れたワイヤーの先に吊されており、そこに遺物が吊り下げられる度に電球は点り、最後にはそれらの光が「星座」のように広がる。  
——見えたもの、聞こえたものだけが「歴史」ではない。遺物や死者たちのひそやかな息づかいが暗号器官(クリプトグラフ)に届いたとき、見えないものが見え、聞こえないものが聞こえる……。都市についての報告演劇。

## 演出ノート

この演劇のテキストは都市についての報告書である。

ここで報告される都市は架空の都市であるが、かつて世界のどこかにあったであろう都市の相貌を持っている。

また、この報告の中には、都市に住む人々の記憶も含まれている。それらは、私たちの知る世界の歴史に一度も記録されなかったものである。それゆえ私たちは知る術がない。

しかし、それらの記憶は、都市の遺物（あるいは廃棄物）として残されている。その遺物が発する暗号(クリプトグラム)のような秘められた文字を暗号受信器(クリプトグラフ)である俳優が読み取り音声化するというのが、この演劇で試みたかったことである。その過程を経て、終幕後残されるエキリチュールが布に包まれ吊り下げられたゴミの星座となれば、と思った。

俳優の吐くせりふはある意味、様々な都市の来歴を知る遺物たちを供養するための呪文である。また、その仕事は追悼のための吊いの身振りである。それは、人々の取るに足らない思い出やくどいように届くスパムメール、失われた都市の痕跡が刻まれた街路の名前、差出人も宛先も知れぬ手紙の断片である。あるいはまた、いつか見たかもしれない夢の中の光景である。

それらは、誰にも漏らすことのなかった重大な秘密(クリプト)とかかわりを持つものではないのか。ただし、その秘密のことは誰も知ることができない。

重大な秘密はなぜ漏らすことができないのか。いったい秘密とはなにか。

この作品の後半で反復される「言おうとしないことを許してください」という

せりふは、ジャック・デリダの『秘密の文学』からの引用である。

アブラハムが息子のイサクに死を与えようとしたことを誰にも語らなかったこと。そのことを神との固有な強い結びつきとして捉えながらも、やはり、なぜ神が「この私」にそのような試練を命じるのかはアブラハムには理解できない。それでも、神との密約があれば最愛の者であっても神に差し出すということ。そこでは、秘密が秘密のままに受容されるのである。つまり、アブラハムは秘密を神と共有しながらも、その秘密にする行為自体の根拠は神と共有しえない。なぜ私が私の息子を殺さねばならないのか。神と私だけの契約とはいえ、それがこの私なのは、何故か。息子の犠牲を神に命じられたのが「私である」ということの陶醉と耐えきれなさ。

このような秘密を持つということは、その秘密の二重の意味を許容することであり、それゆえとてもおそろしいことである。秘密はまったく理解できない他者の言語で書かれている。秘密を抱えるということは異質な他者の領土を飛び地のように自らの身体に置くことだ。

「言おうとしない」のはなぜかという、秘密にしなければならない何らかの超越的なものによる要請とその受容、そして、そもそもその言おうとすることを言うことができないからだ(言おうにも意味をなさないことは言いようがない)。そのことについて書き、演劇にすることがこの作品についての主題であった。そこには受難を生きようとするものへの眼差しのあり方と聞き耳を立てる術があるのではないか。

松田正隆

〔クリプトグラフ〕(2007) 上演台本より

### 松田正隆の仕事について——壁の間をぬう、挟間を動く 内野儀（うちの・ただし）

あたり一面、壁だらけである。かつてはやった「バカの壁」もそこに入れてもよいが、自分で築いた壁、(歴史)や(世間)が築いた壁、ディスコミュニケーションの壁等々、多種多様な壁だらけで実に息苦しい。穴を開けようともがくと、さらに息苦しくなる。壁がないことにしてみると、今度はどうやって呼吸したらよいかわからず、思わず息を詰めてしまう。

日本の現代演劇なる諸実践を見ていると、同じような息苦しさを覚える。今現在支配的なのは、近視眼的に身の回りだけを凝視することがもたらす息苦しさであり、なぜもうちょっと遠くを見ようとしないのか、と思えてくる。もちろん、そう簡単に遠くなど見えない。何しろ壁だらけなのである。それにしても、である。動けばいいのに、とわたしは思う。それとも、まったく身動きできないほど、わたしたちは壁に取り囲まれてしまっているというのだろうか?そういう(感触)があることは認めるが、問題は、誰もそれを実際に確かめようとしないように見えることだ。

今、とりあえず動いてみること。ひとつには地理的移動という可能性がある。こちらのほうは、公的助成金がそれなりに出ているので、その気になれば誰にでも、とまでは言わないが、かなり簡単にできる。困難なのは、歴史的移動というやつである。日本演劇にかぎってみても、それにはそれ相応の歴史があり、その時代時代で問われた演劇にかかわる問題系があり、その多くが忘却ないしは放置されたとはいえ、そうした問題系を身体化あるいは言語化した諸実践がすべて消え去ったというわけではない。にもかかわらず、歴史を参照することがデフォルトどころか、まったくその逆に罪悪のようになっている。(新しさ)、すなわち微細な=認知可能な(差異)のみが価値になっている。松田正隆の仕事が興味深いのは、ほとんど例外的に地理的移動と歴史的移動を同時進行的に遂行中であることだ。劇作家としての活動でその名を知られることになった松田の作品は、2004年の『鳥島振動器官』以降のマレBITの会での上演において、日本演劇の歴史的アーカイヴ探訪という様相を呈することになった。それは演劇の原理的思考とも呼べるものだが、現場的な俳優との作業から、演劇の言葉と

### ノスタルジーの効用 森山直人（もりやま・なおと）

松田正隆とマレBITの会の最近作である「声紋都市―父への手紙」が、「坂」の演劇であったことは、以前に書いたことがある(※)。舞台中央に大きな「坂」の装置が置かれ、俳優たちが仰向けのまま、白い無機質な「坂」の表面を、とてもゆっくりした速度ですべり落ちていく。その「坂」の後方には、これまた大きなスクリーンがあり、そこには上演時間を通じて、現実の長崎の街並が、そして印象的な坂の風景がいくつも現われるのである。なかでも、市街を遙かに見下ろしながら、ロープウェイが斜面をゆっくり昇ったり降りたりする映像の、あの速度が持つ身体感覚は忘れることができない。その映像を見ながら、私は、同じように、「ああ、坂道をたっぷり時間をかけて昇ったり降りたりしてみたい!」、という強い感情に不意に襲われ、すっかり夢中になっていた。

このような個人的な体験は、松田正隆の作品にとって、けっして些末な事柄だとは思えない。私がここで考えてみたいのは、ノスタルジーをめぐる問題である。ゆっくりと流れる時間を懐かしむこと自体は、いまや度し難いノスタルジーでしかあり得ない。高度情報化社会に生きている「私達」にとって重要なのは、パソコンやケータイの画面に次から次へと強制的に送り届けられてくる無数の剣呑な、急な坂道のような大量の情報群を、一瞬にして飛び越えたり、時にはあたかもそんな坂道など存在しなかったかのように、一気に駆け抜けたまま涼しい顔を崩さずにいる「技術」の方であることは明白だ。だから、問題はゆっくり歩くことそのものではない。そんなことはせいぜい癒しにしかならないし、それは悪い意味でのノスタルジー、フェティッシュ化されたノスタルジーである。けれども、あえていえば、よいノスタルジー、効用あるノスタルジーともいうべきものがあるのではないか。ノスタルジーが瞬間的に喚起する強い感情によって、「私達」自身のなかに生じるざわめきへ、じっと耳を澄ます「技術」を修得しなければならないときが、いまなのではないだろうか。ノスタルジーが呼び起こすのは、忘却の彼方に沈められた無数の殺戮された記憶たちである。さっきまで、涼しい顔で微笑んでいた「私達」の呼吸にいつしか乱れが生じ、滑らかな皮膚がこわばっていく、そんなノスタルジーの体験は、一種の軽い狂気のようなものかも

身体の間関係を、その時々の主眼的関心に従いつつも、実践的に思考してゆこうとする
ことである。

そこには、いわゆるアンGRA演劇や「静かな劇」のエコーがかすかに響いていると同時に、太田省吾という戦後演劇の巨人がその活動の最終局面で到達した境位を、別方向から眼差しかつアップデートさせようという強い意志が感じられる。同時に松田は、海外公演にも積極的に取り組むことで、日本のコンテキストでは孤立せざるをえない自身の方法的探求が、地理的広がりの中で重要な意味を持ちうることを感じつつもある。

※ 「ここではないどこか」という(普遍)に傾斜しすぎるくらいもあった『王女A』(2005)や『アウトダフェ』(2006)につづいて上演された『クリプトグラフ』(2007)は、こうした松田の方法的探求のひとつの頂点を示す。「暗号化された都市の記憶を音声化する」を基本コンセプトにするこの作品では、何よりその「音声化」を担当する身体たちのありようが決定的である。登場人物を再現するのでも、俳優の自己／内面を表現するのでもない。松田が選んだ雑多かつ多様なレベルにある言葉群を発語することによって、上演に登記されてゆく俳優達の身体は、「その人の身体」としかいいようのない独特の固有性を胚胎し、上演空間を埋めてゆく(だけである)。あるいは、埋めそこなう(だけである)。それらは、「確かな手応え」などは縁のない「生きてしまっている／生かされているわたしたちの身体」である。日本ローカルであると同時に、グローバルに共振する可能性のある身体である。

このようにして松田は、わたしたちの周囲にはりめぐらされた壁の間をぬってみせる。その挟間を動いてみせる。この(くみせる)という身振りが何より彼の上演の特質になる。そしてそれは、壁に攻囲されているにしても、少なくとも演劇においては、動いてみるくらいにはまだ可能だという希望をわたしたちに与えてくれもするだろう。

知れない。「間」を殺戮する者は「間」に復讐される。だが、もしも間と交信し、新たな関係を築いていく手掛かりのひとつにノスタルジーがあるのだとすれば、そんなノスタルジーを、「舞台」や「劇場」などと呼ばれる場所で、まさにいま、実現することはできないだろうか。

よく言われるように、もしも1960年代の間が、黒い間だったとすれば、現代の間は白い間である。その間には死んだ記憶が漂っていて、それらを遠ざけようとするばするほど、間はいいよいよ白くピカピカと輝きをます。現代のマレBIT=客人は、そんなどうしようもない白さにあらためて穴を穿ち、途方もない愛着を反転させることによって、「私達」の生と歴史の見えない基盤を、ざわめく触感として提示しようとしている他者に見える。

※ 劇評メールマガジン「wonderland」に掲載された拙文を参照されたい。(http://www.wonderlands.jp/index.php?itemid=1025&catid=3)
また、「声紋都市」に関連して、1990年代から2000年代までを概観した文章として、現在はマレBITの会公式HPに掲載されている以下の文章もある。(http://www.marebito.org/news-voice-moriyama.html)